

令和7年 3月26日	病害虫発生予報 4月号	茨城県病害虫防除所
---------------	----------------	-----------

機械での転落・転倒・はさまれなど農作業事故が増加する季節です。

危険箇所を確認し、余裕を持った作業を行いましょう。

< 目 次 >

I. 今月の予報	
【注意すべき病害虫】	
イチゴ：灰色かび病、ハダニ類、アザミウマ類	1
促成・半促成ピーマン：うどんこ病	2
半促成ピーマン：アザミウマ類	3
促成トマト：黄化葉巻病(タバココナジラミ)	3
促成トマト：黄化病(タバココナジラミ・オンシツコナジラミ)	4
○麦類赤かび病の防除を適期に行いましょう！	4
【その他の病害虫】	
イチゴ、促成ピーマン、促成トマト、促成キュウリ、春ハクサイ、春レタス	5
○育苗期からトマトキバガの発生に注意しましょう。	6
○サツマイモ基腐病の防除対策（育苗期～植付期）	7
○水稻における紋枯病の防除対策について	8
○イネ縞葉枯病（ヒメトビウンカ）の防除について	8
【防除所レポート】	
チャバネアオカメムシの越冬状況（令和7年2月調査）	9
II. 今月の気象予報	10
最新の農薬登録内容は、農林水産省ホームページの 「農薬登録情報提供システム」(https://pesticide.maff.go.jp/)で確認することができます。	
詳しくは、病害虫防除所へお問い合わせ下さい。Tel :0299-45-8200 ホームページでは病害虫・フェロモントラップ・農薬関連情報がご覧いただけます。 https://www.pref.ibaraki.jp/nourinsuisan/nosose/byobo/boujosidou2/ ※病害虫の発生状況や、適切な防除方法は地域により異なる可能性があります。病害虫の防除や農薬についてのご相談は、お住まいの都道府県にある病害虫防除所等の指導機関にお問い合わせください。	



I. 今月の予報

【注意すべき病害虫】

イチゴ

1. 灰色かび病

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	平年並～やや多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 3月中旬現在、発病果率（本年値 0.02%、平年値 0.02%）は平年並、発生地点率（本年値 10%、平年値 3%）は平年並～やや高い。
- ② 3月中旬現在、発病株率（本年値 0.8%、平年値 0.4%）、発生地点率（本年値 20%、平年値 8%）ともに平年よりやや高い。

[防除上注意すべき事項]

- ① 多湿条件で発生しやすいため、換気等によりハウス内の湿度を低く保つ。
- ② 罹病部はできるだけ取り除き、ハウス外に持ち出して適切に処分する。
- ③ 薬剤散布は、薬液が葉裏や葉柄にもよくかかるよう十分な量で丁寧に行う。また、薬剤感受性の低下を防ぐため、FRAC コードの異なる薬剤をローテーション散布する。
- ④ ミツバチや天敵を使用している場合は、薬剤の影響日数等に十分注意する。

2. ハダニ類

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	やや多い～多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 3月中旬現在、寄生葉率（本年値 36.3%、平年値 19.2%）、発生地点率（本年値 80%、平年値 57%）ともに平年よりやや高い～高い。

[防除上注意すべき事項]

- ① ハダニ類は増殖が速いので、発生の少ないうちに防除を徹底する。
- ② 薬剤散布は、薬液が葉裏や葉柄にもよくかかるよう十分な量で丁寧に行う。また、気門封鎖剤以外については、薬剤抵抗性の発達を抑えるため、IRAC コードの異なる薬剤をローテーション散布する。
- ③ ミツバチや天敵を使用している場合は、薬剤の影響日数等に十分注意する。

(イチゴ 続き)

3. アザミウマ類

[予報内容]

発生時期	発 生 量	発生地域
—	やや多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 3月中旬現在、寄生花率（本年値 6.2%、過去 8 年平均値 3.9%）、発生地点率（本年値 80%、過去 8 年平均値 38%）ともに平年よりやや高い。

[防除上注意すべき事項]

- ① アザミウマ類は増殖が速いので、花をよく観察し、発生の少ないうちに防除を徹底する。
② 青色粘着トラップを 10a あたり 100～400 枚設置すると密度低減に有効である。
③ 薬剤散布は、アザミウマ類の寄生部位である花にかかるよう十分な量で丁寧に行う。また、気門封鎖剤以外については、薬剤抵抗性の発達を抑えるため、IRAC コードの異なる薬剤をローテーション散布する。
④ ミツバチや天敵を使用している場合は、薬剤の影響日数等に十分注意する。

（令和 7 年 2 月 28 日発表 病虫害速報 No. 13 参照）

促成・半促成ピーマン

1. うどんこ病

[予報内容]

発生時期	発 生 量	発生地域
—	やや多い （促成ピーマン）	鹿行地域
	平年並～やや多い （半促成ピーマン）	

[予報の根拠]

- ① 3月中旬現在、促成ピーマンにおける発病度※（本年値 5.3、平年値 2.1）は平年よりやや高く、発生地点率（本年値 67%、平年値 25%）は平年より高い。
② 3月中旬現在、半促成ピーマンにおける発病度※（本年値 0.8、平年値 0.1）、発生地点率（本年値 25%、平年値 10%）ともに平年並～やや高い。

※発病度：株ごとの発病程度をもとに算出した数値、最小値は 0 で最大値は 100 となる。

[防除上注意すべき事項]

- ① 発生が多くなると防除が困難になるため、初期防除を徹底する。
② 罹病部は新たな伝染源となるため、できるだけ取り除き、ハウス外に持ち出して適切に処分する。
③ 薬剤散布は、薬液が葉裏にもよくかかるよう十分な量で丁寧に散布する。また、薬剤感受性の低下を防ぐため、FRAC コードの異なる薬剤をローテーション散布する。
④ 天敵を使用している場合は、影響が小さい薬剤を選択する。

半促成ピーマン

2. アザミウマ類

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	やや多い	鹿行地域

[予報の根拠]

- ① 3月中旬現在、寄生花率（本年値 64.0%、平年値 39.7%）は平年よりやや高い～高く、一花あたりの寄生虫数（本年値 7.0 頭、平年値 3.7 頭）は平年よりやや多い。
- ② 3月中旬現在、被害果率（本年値 1.0%、平年値 0.1%）、発生地点率（本年値 25%、平年値 6%）ともに平年よりやや高い。

[防除上注意すべき事項]

- ① アザミウマ類は増殖が速く、各種ウイルス病を媒介するので発生の少ないうちに防除を徹底する。
- ② 青色粘着トラップを 10a あたり 100～400 枚設置すると密度低減に有効である。
- ③ 薬剤散布は、薬液が花や果実にもかかるよう十分な量で丁寧に行う。また、薬剤抵抗性の発達を抑えるため、IRAC コードの異なる薬剤をローテーション散布する。
- ④ 天敵を使用している場合は、影響が小さい薬剤を選択する。

促成トマト

1. 黄化葉巻病（タバココナジラミ）

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 3月中旬現在、発病株率（本年値 0.8%、平年値 0.1%）、発生地点率（本年値 30%、平年値 4%）ともに平年より高い。
- ② 3月中旬現在、一部圃場においてタバココナジラミ成虫の発生を認めている。

[防除上注意すべき事項]

- ① 発病株は伝染源となるため、速やかに抜き取り、適切に処分する。
- ② 媒介虫であるタバココナジラミの施設内への侵入および施設外への飛び出しを防ぐため、開口部に 0.4mm 目合い以下の防虫ネットを設置する。施設ビニルや防虫ネットに破損がある場合は必ず補修する。
- ③ 黄色粘着板や黄色粘着テープを施設内や周辺部に設置し、タバココナジラミ成虫を捕殺する。
- ④ タバココナジラミは多発すると防除が困難となるため、発生の少ないうちに防除を徹底する。
- ⑤ 薬剤散布は、薬液が葉裏にもよくかかるよう十分な量で丁寧に行う。また、気門封鎖剤以外については、タバココナジラミの薬剤抵抗性の発達を抑えるため、IRAC コードの異なる薬剤をローテーション散布する。
- ⑥ 黄化葉巻病耐病性品種は、ウイルスに感染した場合発病は抑制されるが、感染株は本病の伝染源になるため、タバココナジラミの防除は感受性品種と同様に行う。
- ⑦ 雑草はタバココナジラミの生息場所となるため、ハウス内外の除草を徹底する。

（令和 7 年 2 月 4 日発表 病害虫速報 No. 12 参照）

(促成トマト 続き)

2. 黄化病 (タバココナジラミ・オンシツコナジラミ)

[予報内容]

発生時期	発 生 量	発生地域
—	多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 3月中旬現在、発病株率(本年値 3.6%、平年値 0.3%)、発生地点率(本年値 20%、平年値 3%)ともに平年より高い。
- ② 3月中旬現在、一部圃場においてタバココナジラミ成虫の発生を認めている。

[防除上注意すべき事項]

- ① 発病株は伝染源となるため、速やかに抜き取り、適切に処分する。
- ② 媒介虫であるコナジラミ類の施設内への侵入および施設外への飛び出しを防ぐため、開口部に 0.4mm 目合い以下の防虫ネットを設置する。施設ビニルや防虫ネットに破損がある場合は必ず補修する。
- ③ 黄色粘着板や黄色粘着テープを施設内や周辺部に設置し、コナジラミ類を捕殺する。
- ④ コナジラミ類は多発すると防除が困難となるため、発生の少ないうちに防除を徹底する。
- ⑤ 薬剤散布は、薬液が葉裏にもよくかかるよう十分な量で丁寧に行う。また、気門封鎖剤以外については、コナジラミ類の薬剤抵抗性の発達を抑えるため、IRAC コードの異なる薬剤をローテーション散布する。
- ⑥ 黄化葉巻病耐病性品種でも、黄化病は発病するので注意する。
- ⑦ 雑草はコナジラミ類の生息場所となるため、ハウス内外の除草を徹底する。

麦類赤かび病の防除を適期に行いましょう！

麦類赤かび病の防除適期は、六条大麦では出穂～穂揃期に開花を確認した時(出穂期の3日後頃)、二条大麦では穂から蒴殻が出ていることを確認した時(出穂期の12～14日後頃)、小麦では開花始期～開花期(出穂期の7～10日後頃)です。

予測される出穂期および防除適期は麦種や播種期によって異なるため、圃場ごとに出穂状況を確認して適期に防除しましょう。

なお、麦類の予測出穂期および赤かび病の防除適期は病虫害速報での発表を予定しています。防除所ホームページ等からご覧ください。

【その他の病害虫】

作物	病害虫名	発生予測	発生概況及び注意すべき事項
イチゴ	うどんこ病	発生量：平年並	3月中旬現在、平年並の発生である。
	アブラムシ類		
ピーマン 促成	斑点病	発生量：平年並	3月中旬現在、平年並の発生である。
トマト 促成	灰色かび病	発生量：やや少ない	3月中旬現在、平年よりやや少ない発生である。
促成キュウリ	黄化えそ病	発生量：平年並	3月中旬現在、平年並の発生である。媒介虫であるミナミキイロアザミウマの防除を徹底する。
	退緑黄化病		3月中旬現在、平年並の発生である。媒介虫であるタバコナジラミの防除を徹底する。
	べと病		3月中旬現在、平年並の発生である。
	うどんこ病	発生量：平年並 ～やや少ない	3月中旬現在、平年並～やや少ない発生である。
春ハクサイ	べと病	発生量：平年並	3月中旬現在、平年並の発生である。
春レタス	菌核病	発生量：平年並	3月中旬現在、平年並の発生である。
	腐敗病		

育苗期からトマトキバガの発生に注意しましょう。

トマトキバガは、近年、日本に侵入してきた新しい外来害虫で、ナス科の植物を好み、トマト等を食害します。

茨城県では、令和5年10月にフェロモントラップ調査において、初めてトマトキバガ成虫の誘殺が認められ、令和6年の誘殺数は前年より多く確認されました。本年も3月中旬からトラップ調査を開始しています。

現在のところ、本県では農作物での発生および被害は認められていませんが、他の複数の県では、施設栽培のトマトにおいて育苗中や定植後に本種による食害が確認されています。食害が進むと生長点の枯死も認められるため、注意が必要です。

早期の発見・防除が重要ですので、圃場をよく観察し、今後の発生に注意してください。

また、トマトキバガのハウス内への侵入を防ぐためには、ハウス開口部に防虫ネット（目合い0.8mm以下）を設置することが効果的です。

〔トマトでの被害の特徴〕

- ① 茎葉の内部に幼虫が潜り込んで食害し、孔道が形成される。葉の被害は、ハモグリバエ類の食害痕と類似するが、ハモグリバエ類は線状に痕を残すのに対し、トマトキバガは面的に食害する。トマトキバガの食害部分は表面のみを残した薄皮の袋状になり、葉の裏面からでも透けて見える。また食害部の一部に糞の集積が見られ、本種の診断の目安となる（写真1）。
- ② 果実では、幼虫が食入して内部を加害し、数mm程度の穿孔痕が生じるとともに食害部分が腐敗する（写真2）。

成虫や幼虫の特徴等については、令和6年10月18日発表の病害虫速報 No.9を参考にしてください。

トマトキバガの発生が疑われた場合は、速やかに最寄りの農業改良普及センターまたは病害虫防除所に連絡してください。



写真1 トマトキバガ幼虫によるトマト被害葉



写真2 トマトキバガ幼虫によるトマト果実の食害

（写真1、2は農林水産省植物防疫所原図）

サツマイモ基腐病の防除対策（育苗期～植付期）

1. 育苗期～植付期

（1）育苗にあたっての注意

- ・ 苗の増殖は、ウイルスフリー苗を用い、土壌消毒を行った圃場で行う。
- ・ 来歴が不明な種イモや切苗は絶対に使用しない。
- ・ 多発地域からは、種イモや切苗を持ち込まない。
- ・ 生産者間で種イモや切苗の譲渡等を行わない。
- ・ 苗床に本病の発生が確認された場合は、速やかに関係機関へ連絡し関係機関の指導の下、発病株を施設外に持ち出し、適切に処分する。

（2）作業にあたっての注意

- ・ 発生地域と行き来のあったコンテナ等は、洗浄、消毒してから使用し、残さや土を圃場に持ち込まない。
- ・ 作業する圃場ごとに、農機具や長靴等についた土は良く落とし、水で良く洗浄する。
- ・ 植付前に、圃場内に残った作物残渣の分解及び排水管理を行っておく。

（3）健全苗を確保するために

①苗床・育苗準備時の対応

- ・ 種イモから苗を増殖する場合は、病害等が発生していない圃場で生産されたイモを選別して用いる。伏せ込む前の種イモは消毒を行う。

②採苗時の対応

- ・ 採苗時のハサミはこまめに消毒を行う。苗は地際から 5 cm以上の位置で切る。
- ・ 採苗した苗は、採苗後速やかに苗消毒を行う。
- ・ 苗消毒用の薬液は、使用当日に調製し、登録の内容に従って浸漬処理を行う。

③購入苗への対応

- ・ 切苗を購入する時は、基腐病対策が徹底されていることを販売店に確認し、未消毒の場合は購入後に必ず苗消毒を行う。

2. 侵入に備えた対策

- ・ 排水の悪い圃場は、本病が侵入した際、発病しやすい傾向があるため、明きょ設置や耕盤破碎、枕畝の途中に排水溝を設置するなど、排水対策を徹底する。
- ・ 圃場ごとに植え付けた苗の苗床の場所や採苗日、ウイルスフリー苗などの購入先を記録する。

※本病が疑われる症状を見つけた場合は、速やかに各地域の農業改良普及センターまでご連絡ください。

茨城県総合防除計画におけるサツマイモ基腐病の遵守事項

茨城県では、全国的に発生しているサツマイモ基腐病について、すべての農業者（家庭菜園を含む）の皆様を守っていただくルール（遵守事項）を定めました（令和 5 年 4 月 1 日に施行された改正植物防疫法に基づくものです）。

○遵守すべき事項

- ・ 県が実施するまん延防止のための調査に協力する。
- ・ 本病の発生を確認した場合には、関係機関へ連絡し、関係機関の指導の下、発病株を抜き取り、圃場（苗床を含む）外に持ち出す。
- ・ 本病発生圃場では、2 年間、サツマイモを作付けしない（関係機関の指導の下、栽培管理する場合を除く）。
- ・ 本病発生圃場から種イモを採取しない。
- ・ 本病発生圃場では、発生の拡大が無いことを確認する。

水稻における紋枯病の防除対策について

水稻の紋枯病は、イネの病斑上に形成された菌核が圃場にとどまり次作の伝染源となるため、毎年同じ圃場で発生しやすい傾向があります。近年、発生が認められている圃場では特に注意して対策を行いましょう。

[特徴]

前年の被害株や畦畔等の罹病雑草に形成された菌核で越冬し、伝染源となる。菌核は代かき時に水面に浮上し、株元に漂着する。気温が上昇し、株間の湿度が高くなると、菌核から発芽した菌糸が伸長して葉鞘内に侵入し、楕円形病斑をつくる。本病にかかると、下葉からしだいに枯れ上がり、イネの茎が弱くなって倒伏しやすくなる。

[防除上注意すべき事項]

- ① 代かき時の浮遊物に菌核が混入しているので、畦畔沿いにたまったごみを取り除き、適切に処分する。
- ② 常発圃場では育苗箱施用剤を使用する。
- ③ 窒素肥料の多用を避け、過繁茂にならないようにする。

イネ縞葉枯病（ヒメトビウンカ）の防除について

イネ縞葉枯病は、ヒメトビウンカによって媒介されるウイルス病で、多発すると減収する病気です。発病してからの治療はできないため、ヒメトビウンカの防除が重要です。

令和7年1月下旬～2月に県西、県南、県央地域15地点の水田畦畔等からヒメトビウンカ越冬世代幼虫を採集し、イネ縞葉枯ウイルス保毒虫率を調査しました。その結果、15地点中9地点において、保毒虫率が5%以上※となりました。

今後、ヒメトビウンカの発生量が多くなると、イネ縞葉枯病の発生が多くなるおそれがあります。育苗箱施用によるヒメトビウンカの防除を行い、耕種的防除を組み合わせた総合防除により、本病の防除対策を徹底しましょう。

※農業研究所作成のマニュアルにおいて、育苗箱施用等による薬剤防除を推奨する値
(令和7年3月19日発表 病害虫速報 No.14 参照)

チャバネアオカメムシの越冬状況（令和7年2月調査）

ナシ、カキ、リンゴなどの重要害虫であるチャバネアオカメムシ（写真）について、越冬数の調査結果をお知らせします。

本年2月上旬に山林の表層土を含んだ落葉を1地点当たり30ℓ採取し、チャバネアオカメムシの越冬成虫数を調査しました。落葉の採取は常陸太田市、水戸市、笠間市、小美玉市、茨城町、行方市、鉾田市、石岡市、つくば市、桜川市の合計42地点で行いました。

その結果、越冬成虫数（本年値0.05頭、平年値2.33頭）は平年より少なく、越冬地点率（本年値5%、平年値44%）は平年より低くなりました（表）。

本年を含む過去11年間の越冬状況の推移をみると、越冬成虫数・越冬地点率ともに多い年と少ない年を交互に繰り返しており、本年は少ない年にあたります（図）。また、過去11年のうち越冬成虫数・越冬地点率ともに少なかった年の越冬世代成虫の果樹園への飛来数（4～7月）は、平年値と同等か下回る値で推移する傾向にあります（データ省略）。そのため、令和7年の4月から7月までの越冬世代成虫の飛来数は平年並～やや少ないと予測されます。

病虫害防除所では果樹カメムシ類について、予察灯調査（4～10月）や、サクラにおける発生量調査（4～5月）を行いますので、今後発表する情報を参考にしてください。

表 チャバネアオカメムシの越冬状況

調査項目	令和7年2月		平年 ³⁾
	調査値	順位 ²⁾	調査値
越冬成虫数(頭) ¹⁾	0.05	11位	2.33
越冬地点率(%)	5	11位	44

1) 成虫数／落葉30ℓ当たり

2) 本年を含む過去11年中の順位

3) 平成27～令和6年の平均値



写真 チャバネアオカメムシ（成虫）

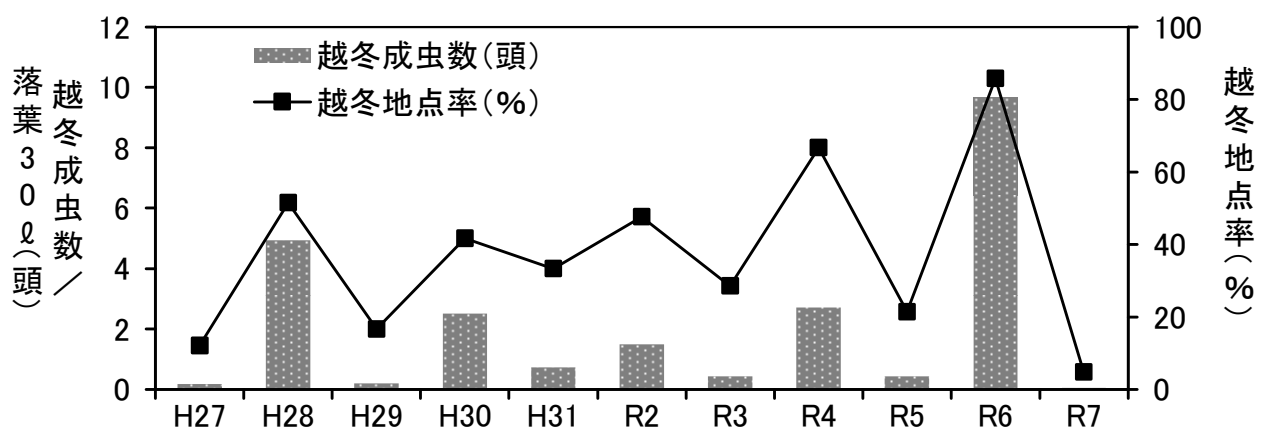


図 チャバネアオカメムシの越冬成虫数及び越冬地点率の年次推移

Ⅱ. 今月の気象予報

関東甲信地方 1 か月予報

(予報期間 3 月 22 日から 4 月 21 日)

気象庁 (3 月 20 日 発表)

< 向こう 1 か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率 (%) >

[確率]

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	関東甲信全域	20	40	40
降水量	関東甲信全域	30	40	30
日照時間	関東甲信全域	30	40	30

[概要]

天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

< 1 週目の予報 > 3 月 22 日 (土曜日) から 3 月 28 日 (金曜日)

気温 関東甲信地方 高い確率 80%

< 2 週目の予報 > 3 月 29 日 (土曜日) から 4 月 4 日 (金曜日)

気温 関東甲信地方 平年並の確率 40%

< 3 週目から 4 週目の予報 > 4 月 5 日 (土曜日) から 4 月 18 日 (金曜日)

気温 関東甲信地方 高い確率 40%

農薬を使用する際は

- 1 使用する農薬の「ラベル」と登録変更に関する「チラシ」等を必ず確認し、適用作物、使用方法、注意事項等を守りましょう。
- 2 散布時には、周辺作物に飛散 (ドリフト) しないよう注意しましょう。
- 3 農薬の使用状況を正確に記録しましょう。
- 4 薬剤抵抗性の発達を抑えるため、作用機構分類※ (FRAC コード、IRAC コード) の異なる薬剤を用いてローテーション散布しましょう。
- 5 農薬の使用後は、散布器具やホース内等に薬液が残らないように良く洗浄しましょう。